
ユメみたゾンビ

TOKIAME

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ユメみたゾンビ

【Nコード】

N6375Y

【作者名】

TOKIAME

【あらすじ】

時は遡ることもなく現代。異世界のお嬢様と異世界の存在するはずがなかった人造人間召使の少年。彼女に応えれば御褒美を、できなければ制裁を！ 護れない物が無いと信じていたあの日、人間には理解できない彼の理解不能な脳味噌がショート。神にはなれない不完全少年の御伽噺。

プロローグ

あなたを護ることが本当に正しいのか。

あなたを抱き締めることが本当に正しいのか。

あなたといることが正しいのか。

あなたの涙を舐めるのが本当に正しいことなのか。

あなたを愛するのが正しいことなのか。

あなたを命令によって裏切るのは正しいことなのか。

俺は、未だ、まだ、マダ、理解不能の人間だ。

でもそれが、理解不能な人造人間？ もしくは人ではない？

理解不能だから、生きて、いきで、イキテ、散りゆけ花弁。

届いた言葉は全て理解不能。

だからこそ、美しい。

1 - 1 初対面の動揺

魔法が存在する世界。

そんなものは無い。そして、この世界も然り。

魔法が存在したのは何百年前の事だろうか。

今では存在すらしなかったかのように、その存在自体を知らない者が大半を占めている。

現在戦争で使用されるのは、科学技術が発達したこの世界には似つかわしい

“ 魔物 ”

モンスターとも魔獣とも様々な名を持ち、その種類は何十、いや何百とも知れない。

全てを知るのはこれらを作った魔物の王、魔王。

いや、魔王自体存在するのかしていないのか。

何にしる、魔物がその姿を現し始めたのも、魔法の衰退時期と同時期の、何百年前もの事だ。

当時の事を知る者など、既^まにいない。

エルフやアマゾネス、況^ましてや魔女などは、もう空想上の生物と成り果てた。

しかし、魔物を国家軍事力として使用するのは何百という国が存在する世界でも数ヶ国のみ。

人間ではない生物を使用しているのだから、戦争において強国なのは目に見えている。

だからこそ、魔物は貴重だ。

その数ヶ国に対抗するために新たに誕生したのが、人造人間。

俗に言う人形や機械兵器、作られた人間と言っても過言ではない。彼らは、心を持たない。

それは作られた人間なのだから当然だが、実の所人造人間は本をただ糾せば人間の人体実験を繰り返した果てに生まれた、奇跡の産物なのだ。

心を持たない彼らは、感情に左右されない。

命令されれば素直に行動に移し、ミッションコンプリート。

恥ずかしいと思う事も、悲しい事も、愛したいという感情ですら、破棄されている。

少々表現としては間違っているかもしれないが、植物人間のようなのだ。

心を持たないからこそ、人を殺すことも、魔物を殺すことも厭わない。

普通ならば嫌悪を抱くような血の雨だって、何も思わず浴び続ける。

主人の命令は絶対で、口出しされようが、途中で止められようが、一度受けた命令は必ず遂行する。

だからこそ、ある種の欠陥品だとも言われているが、とても便利な“人間”だ。

体の大半はサイボーグ化され、全身が武器のよう。

蹴られようが殴られようが斬られようが、今までは想像上の鉋物とされてきたオリハルコン製の体は決して屈せず、壊れる事もない。

寿命は存在せず、故に死なない。

不死身。

平均労働年月は故意に壊される以外の事例としては、二百年単位。年もとらず、怪我もせず、地も流れず、病気にもならず。

こんなにも便利なモノが世の中にはあるのだろうか。

今では戦闘兵器としての用途以外にも、貴族や王族の護衛役としても使用されるようになった。

ただし、それは一部に重大な欠陥のある人造人間に限られているが。

そしてまた、一人の人造人間が新たに雇われるようになった。

場所は世界最大級の先進国の王国、ヴェルメタ。

その中心地の王都、モルノバ在住の貴族エレザート家。

エレザート家の年端もいかない娘に仕えることになった、製造から五十年経った少年型人造人間。

彼が見るものは、全て、理解不能な人間の感情論だった。

* * * * *

「本日より貴女様に仕えることになりました、製造 No. 6326
です」

優雅に、だが無機質な雰囲気漂わせながら薄紫色の髪をした少年が、目の前に立っている一人の少女の足元にひざまずき、お辞儀をした。少年とは言っても、実質には人間ではない。

彼の宣言通り本日付より少女に仕えることになった、人造人間だ。そして、同時に今から人造人間と言う肩書きすらも剥奪はくたつされ、ただのボディガード兼召使となる。

悪く言えば、少女の奴隷とらえになると言っても強ち間違あながいではないだろう。

そんな少年を見下ろしながら、腰まではあるだろう美しく長い金髪を揺らす少女が少年と視線を合わすように、彼同様大理石の床に膝をついた。

つまり、お嬢様の身である少女が、召使の彼に跪いたのだ。

顔を上げた少年が、主人であるはずのこの少女が何故か、自分にある意味跪いている姿を見て思わず目を剥いた。

感情は無いが、予想外の事が起これば人間同様驚く。事前に組み込まれている、お情け程度の人造人間用プログラムである。

「……何を、していらつしやるのでしょうか？」

「あなたこそ、なんで跪いているの？」

大きな水色の瞳を純粹無垢むくの光を宿らせながら、クルクルと動く。単純な疑問かもしれない。しかし、少年にとってはその質問自体が理解不能だった。

「召使が主人に跪くのは当然です」

「私があなただのご主人様なの？ 私、人間を雇った覚えはないのだけれど」

少女の質問は、またも少年の意表を突くものだった。

どうやらこの少女、人造人間が人間から造られているため人間そのものの姿でしかないという事を知らず、ロボットのような物を想像していた様。

世間知らず、ここに露呈ろていされる。

だが、少年がそれを間違いだ、と指摘してもそれを恥らうことから少女はしなかった。

人造人間の様に、この少女にはココロに欠陥があるのだろうか。

しかし、それを少年が考えた所で、この少女は未来永劫変わることなく、彼女が死に絶えるまで自分の主人でしかない。

“ 身分みまを弁まえた行動をとれ ”。

これは、彼がこの場所に来る前に製造者の年老いた科学者から与えられた、ただ一つのアドバイスだった。

それに従い、少年が何も言わずに少女の手を取った。

「お立ちください。貴女は、俺に跪くような人ではない」

「あなた、召使だけと自分のこと俺って言うのね」

「どうも、自分、と言うプログラムが組み込まれていないようです」
「何でもかんでも、プログラムに頼ってちゃ駄目。」

自分で考えて行動するからこそ“ニンゲン”でしょ？」

俺は人間ではない。

そう言おうとした。だが、それを否定すると、自分が人間だった頃の事を否定してしまうようなものだった。

俺は人造人間で、作られた人間なんだ。

自分に暗示をかけ、少年が一度深く呼吸をした。

「俺は、人間の絞り粕しぼの様なものです。」

だから、純粹に人間として扱われると非常に居た堪れない」

「人間は、人間らしく。犬は、犬らしく。神さまは。神さまらしく」

当然でしょ？

目の前の可憐な少女が、年相応とは思えない程の美しい笑みを浮かべた。

しかしその笑顔に魅了されるほど、人造人間は脆もろくない。

至上の笑みですら眼中に入れず、手を取ったままの少女を立ち上がらせた。

少年も同時に立ち上がり、手を離して体の横につける。

自分よりも10数cm程背の低い少女を見下ろす。

「では、俺は貴女様の考えにはそぐわないですね」

「あら、あなたも私の傍で仕えるからには、人間同様の生活をしてもらおうよ？」

有無を言わせない少女の強い口調が少年の奴隷精神を虐げる^{しいた}。

主人の命令だ。人造人間の彼には逆らうこともできず、ただその命令を実行するだけだ。

それが嫌などと、少年には思っ心すら無い。

何も無い少年の心にあるのは、機会で作られた思考プログラムだ。

少年はその命令に、一つ深くお辞儀をした。

1 - 2 お世話上手のお嬢様

「顔上げてくれる？」

少女に頼み込まれるような口調で言われ、少年が顔を上げた。相も変わらず目の前にいるのは、可愛らしい顔立ちの少女。

少年が作られたのは五十年前。

あれから年十年と年を重ねても、少年の若さ特有の肌触りもサラサラとした髪も無機質な瞳も何一つ変わっていない。

オリハルコン製の体、といってもも人造人間が全身隈なくオリハルコンでできている、というわけではない。

細かく言えば、オリハルコン製なのは内側で、外は見た目普通の人間と変わらない、何処にでもいるような普通の少年だ。

だが、少年の顔立ちは美しく、普通の少年というには少々惜しいが。

肌触りは普通の人間と何ら変わらない。

ならば、どうして斬られたとしても傷一つ付かないのか。

その謎の解明は、開発者の老い耄れた科学者本人によりなされた。科学者によれば、人造人間本人による危機本能が発動した際に、そのオリハルコン製の体は本来の力を発揮するのだとか。

力、というよりも能力、と表現した方が正しいのかもしれない。

それは、少年の知るところではないが。

それを疑問に思うことすら、少年には不可能だからだ。

だから、目の前の少女もあと数十年経てば顔には深い皺しわが刻まれ、髪は抜け落ちていく。それが残念でならない。

そんなことを思うことすら、彼はしないのだ。

人造人間として心を持たない彼らの特徴。

「あなたの名前、聞いてもいいかしら？」

「先ほども申し上げたように思いますが」

「あれは、製造No. でしょう？ そうじゃなくてあなたの名前、
「よ」

少年がその質問に対して目を泳がせる。

それを見逃さない少女は案外抜け目がないのかもしれない。

すかさず少年に質問を浴びせる。

「製造から何年経ったの？ どうして造られたの？ どうしてあなたに私に仕えることになったの？ 力の程は？ 何ができるの？」

「……全て、お答えしなくてはいいませんか」

「私の言うこと聞いていれば、それなりに良い待遇になると思うけど？」

少女の自信過剰気味の言葉に、少年が眉根を寄せた。

確かに、この少女は貴族の身で、王都モルノバでも五本の指に入る程の権力を持つエレザート家の娘だ。

しかもエレザートとの兄弟の内でも長女のため、ある種エレザートのお姫様とも言える。

つまり、彼女に逆らえば何をされどのような報復が待ち受けているのか。

常人や一般の人々には想像できないことだろうが。

しかし、常人でも一般の人々でもない少年でも、逆らえば何があ
るかには分かったものではない、と聞き本能が働いたわけではないが、
何かを察したらしく大人しく口を開き一つ一つの質問に丁寧に答え
始めた。

「製造年は一九〇〇年代。」

詳しくは覚えていませんが、製造から五十年以上は経過していま

す」

「へえ、随分と昔の事なのね。でもお肌はすべすべ」

質問に答えた後、少女が少年の頬を軽く摘み少しだけ横に伸ばす。少しだけだが、確かな若者らしい手触りで人造人間ではなく、明らかに人間の肌の様。

それはそういう風な仕組みになっているためだが、少女はおそらくその事すらも知りはないだろう。

おお、という感嘆の声が少女の口から漏れた。

ゆつくりと手を離し少女が続けて、と質問の返答を促す。

「貴女は、人造人間がどうして造られたのか、ご存知でしょうか」「存じ上げないわね。でも、戦争で使われていることは昔から知っている」

「確かに元々は戦争での新兵器として造られたのが人造人間です。そして、俺も人造人間。だから、俺も元々は対戦闘用の兵器だったのです」

「じゃあ、どうしてあなたが私の下に来たの？」

「それが貴女の残りの全ての質問に繋がります」

長い話になるため、少年が深く深呼吸をした。

「俺は、欠陥品けっかんひんです」

「人間に欠陥なんてないわよ」

「人間にも欠陥はあります。」

欠陥というには酷過ぎるかもしれませんが、視覚的に障害のある者や身体や日常生活に支障をきたすような身体不満足者。

全てを俺は欠陥品だと認識しています」

「……………あなたの考えが欠陥しているわ」

「そうですね。俺は、思考回路に欠陥があります」

何の感情も出さずに自分の欠陥を開かず少年に、無機質な瞳に、少女が一瞬怖気づいた。

しかし自身のプライドがはたまた主人の意地なのか、何事もなかったかのように、少女が態勢を整える。

「それは、知覚障害かしら？」

「単純な知識や知能に問題はありません。ただ単に、物事を考える思考に欠陥があるのです」

それを彼自身が欠陥と思っているわけではない。

少年の思考回路を、少年を製造した科学者自身が欠陥だ、と彼に告げたのだ。

彼が現在信用しているのはその科学者と目の前にいる主人の少女だから、科学者の言葉全てを疑わない。

そして、科学者の持論を曲げようとすら彼は思わない。

科学者という名の親が彼の全てだ。

子供が親の言う事をすんなりと聞くように、彼もまた素直な人間人間。

人造人間に素直も捻くれているもあるのか、と聞かれればそうではない、と否定しなければいけないが。

「人造人間が人を殺すことに躊躇がなく、あなたが躊躇ちゆうしゆするのは当然と考えるもらって結構です。

例えば、人造人間が自分の主人の事を大切に思う。そのようなプログラムは組み込まれていません。

しかし、俺はそのような感情を抱いてしまうんです」

少年が苦々しげに唇を噛む。

これを言うのにも苦労した。だから、伝えるのは嫌だがこれも主

人との関係を結ぶ上での大事な事だ、科学者が言っていたからこそ
の事だった。

自分だけが人造人間の輪から外されて、蚊帳の外。
だからこそ、こんな頭の中に何も入っていないようなお若い女の
子の下へと送られたのだ。

人造人間は、戦場で一人の軍師を主人と認め、指揮に従い壊れる
まで攻撃を続ける。

軍師は自分が死ぬことを名誉とし、人造人間に護られることなく
自ら死に行くように攻撃を仕掛ける。

だから、人造人間に護られることこそ、最大の不名誉。

少年のように主人をとこころ構わず庇ってしまうような人造人間は、
戦争には不向きだ。

不向きというよりも、軍師に必要とされない。

そして、余計な感情を持つ人造人間は戦場ではなく民間地へ仕事
を命じられる。

それが今の少年のように貴族や王族の護衛をする事だ。

なにしろ戦闘能力はお墨付き。

元人間だからこそ意志の疎通ができ、会話することができるこの
最高の下僕の利便さ。

それを主人がどう扱おうが人造人間に反抗心を起こさせるような
感情は併せ持たない。要らないものはボツシユート。

しかし、それを不思議に思わない者もいる。

それが目の前にいる少年のご主人様。

少年の欠陥の説明を何も不思議に思わず、どうしてそれがおかし
いのか、と逆に不思議に思っているようだった。

その反応が少年には理解不能。

「……それって、良い事じゃないの？」

「あ、いえ、そのですね、俺はその欠陥があるから戦闘用ではなく

護衛役に回されたのです」

「だからそれ良い事じゃない。だって、大切にしてもらえらるって事でしょ」

「……そう、ですか」

何も納得できていないが、少年は少しだけ理解できた。

少女の言い分は、自分は戦争をしているわけでもないのだから護ってもらえるのならそれは有難い、という所だろう。

軍師とは違う思考に少年は驚きを隠せない。

首を傾げる動作が目に入ったのか、少女が更に説明を続ける。

「正常な人造人間は、主人を護らない、だっけ？

そうしたら私が魔物に襲われた時誰も護ってくれないわね」

「そうですね。人造人間が正常に造られているのだとしたら、の話ですが」

「人間は魔物に歯が立たない。

そして、一般人も貴族も王族も魔物に唯一効く銃の使用は禁止されている。使用できるのは軍人と人造人間だけ。

だけど剣では魔物の硬い体は貫けない」

「魔物の事、よくご存知のようで」

「褒めても何も出ないわよ。

それで、魔物の唯一の対抗策が人造人間ね。それが護衛になつたら最高だわ」

何をどう考えたら、その結論に辿り着くのか。

悩む素振りは見せず、少年は心の中で少女の言葉を意識してみた。

つまり、脆もろくて弱い人間ではない自分を護ってくれて優しい人造人間が欲しい。

そういつことだろうか。

しかし、それ以外に考え所はない。

少年は自分なりの少女の言葉の訳に納得する。

「分かりました。俺は貴女を護ればいいんですね」

「そういつことよ。じゃあ、あなたの名前を教えてくださいませんかしら」

その言葉に、再び少年の目が泳いだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6375y/>

ユメみたゾンビ

2011年11月20日21時35分発行